

山下須美礼著

『東方正教の地域的展開と移行期の人間像』

―北東北における時代変容意識―

北原かな子

はじめに

本書は、ハリストス正教会として知られる東方正教受容の分析を通して、近世から近代への移行期に北東北という「地域」に生きた知識層の人々がどのように新しい知識を取り入れ、そしてそれにより「地域」はどうか再編されていったかを描き出そうとした力作である。著者の山下須美礼さんは、これまで取り組まれた北東北地域の東方正教受容研究を広島大学大学院文学研究科に博士論文「東方正教受容にみる時代変容意識と地域」として提出し、それが本書の刊行へとつながった。

本書の内容は近年盛んに行われている北方地域社会を中心とする地域史の豊かな研究蓄積の検討の上に立ち、ハリストス正教会本会による公式史料や北東北各地の教会に残された史料、あるいは実際に東方正教を広めていった当時の知識層が残した資料を丹念に読み込んだうえで構成されている。

本書の構成は次のとおりである。

序章

一 問題の所在と本書の課題

二 「世界」への端緒―ロシア人宣教師ニコライ―

三 北方地域社会と士族ハリストアニンの結びつき

第一章 士族ハリストアニンの誕生

第一節 地方知行給人としての素地

第二節 士族ハリストアニンの故郷における伝教

第二章 個別教会の成立と展開

第一節 受洗者名簿にみる教会の成立

第二節 金銭出納簿にみる教会設備の充足過程

第三節 士族集団維持を目的とした教会持続の試み

第三章 伝教区の形成と機能

第一節 伝教区「顕栄会」の意義

第二節 商業活動の展開

第四章 伝教の主体と受容者の展開

第一節 士族ハリストアニンによる東京以西への伝教

第二節 神道教導職の布教活動と正教会

第三節 敗北藩士族としてのハリストアニン

終章 地域における時代変容意識

以下に、本論各章のポイントを簡潔に紹介する。

第一章「土族ハリストアニンの誕生」では、初期ハリストス正教会の信徒から伝教者となった仙台藩士たちのキリスト教受容基盤を、小野荘五郎成信を例として検討している。ここでは地方知行制をとった仙台藩において、藩から割り当てられる給地（知行地）と居住した給人との関係性、および旧仙台藩領においてハリストスの教えが広がって行く過程が検討されている。

第二章「個別教会の成立と展開」では八戸光荣教会、盛岡十字教会、そして現宮城県栗原市高清水に成立した高清水顕栄教会をとりあげ、当時の社会（政治）状況の中における信徒たちによる活動の意味や、金銭収支から見る活動構築過程、教会内のまとまりを形成しながら「教え」が浸透して行く背景にあった要素について検討が加えられている。

第三章「伝教区の形成と機能」は、産声を上げたばかりで組織が未だ脆弱であった当時の各ハリストス正教会が、近隣同士で互いに協力し合う形を取った「伝教区」の存在とその活動について明らかにされている。ハリストス正教会の中で、宮城県北部の「顕栄会」は、その活動の充実ぶりに置いて全国に先駆けるものだった。また、仙台藩の重要な港であった石巻でも、商業活動と教会の興隆とを旨指す動きがあった。本章では佐沼、石巻の地域で商人たちを中心に教えを受け入れ、活用しようとした人々の諸相が語られる。

第四章「伝教の主体と受容者の展開」は、第一章で受容基盤としての知的環境に詳細な検討を加えた小野荘五郎を中心として、東京以西への教勢拡大をになった伝教者の具体的事例、布教の際に競合した神道教導職

に視点を移しての、神道職から見た東方正教、そして土族反乱の一環として位置づけられる真田太古事件や自由民権運動など青森県の政治社会情勢と、ハリストスを受け入れた土族層の動きが分析されている。戊辰戦争で敗北という屈辱を味わった土族たちの危機意識と東方正教会受容との関連は、言うまでもなくプロテスタントなど他のキリスト教諸派の受容とも通じるものだが、ここでは土族たちが指導者層として自らのアイデンティティを快復しつつ地域活性化を図ろうとした姿が、丹念な史料探索と分析から語られる。

終章は、上記の詳細な検討の上に立ち、北東北の地域社会と東方正教を受け入れた人たちとの関係性が論じられる。地方知行制の名残を残す村知識層とも呼ぶべき土族層が東方正教を受け入れたこと―それはすなわち、教義自体よりむしろ地域の指導者であった彼らが自らのアイデンティティを保ち、そして流動する社会情勢の中で地域の未来に向かう手がかりを求める考え方が根本にあったことを、あらためて考えさせられる。特に本書の研究対象が戊辰の傷跡深い地域であっただけに、明治の土族層がキリスト教を受け入れるということの意味を現代の我々に問いかけるものとなっている。

以上を踏まえ、本書の魅力をまとめてみると二つあげることができると思われる。

一つは、なんといっても近代日本における東方正教受容の実情が詳らかされているということである。キリスト教史を研究した高橋昌郎氏がかつてその著書『明治のキリスト教』（吉川弘文館、二〇〇三）で指摘

した通り、日本のキリスト教受容およびその研究の中でもハリストス正教会の広がりについては、それほど知られていなかった。しかし本書では、明治十一（一八七八）年当時の旧仙台藩領の信徒数すでに一六三二名を数えたことが明らかにされている。明治初期からプロテスタントの宣教が行われ、一般にキリスト教が盛んとされる弘前の同時代の受洗者は二十九名 (*Sixtieth Annual Reports of the Missionary Society of the Methodist Episcopal church of the Year 1878*)。文字通り桁違いの数には、ただ驚くばかりである。

二つめとしてあげたいのは、本書がいわゆる無名の知識層を分析対象にしていることである。ここには、ニコライ、沢辺琢磨などの教名を除くと、有名人がほとんど登場しない。中でも、旧仙台藩士でハリストアニン（クリスチャン）である小野莊五郎成信の日記から、彼が東方正教をどのような経緯で受け入れたか、その受容基盤も含めて語られる第一章は、近代化とひとくりにされがちな中に生きる、個々人の有り様を今に伝えて惹き付けられる。

きわめて個人的な感想で恐縮だが、本書を読み進める中で、筆者の脳裏にはかつて住んでいた石巻にある旧ハリストス正教会教会堂の姿が浮んできた。大河である北上川河口の中州に移築されていたこの教会堂は、東日本大震災の大津波で石巻が壊滅的被害を被った時、大河の中にあつたにもかかわらず、かろうじて流されずにその姿を残した。震災後まもなく石巻を訪れてその風景を目の当たりにしたとき、かつてその建物に集った多くの人々の歴史を思わずにはいられなかった。本書で描かれるのは、こうした市井の人々の思いであるように思う。

最後に筆者が研究対象としてきたプロテスタントとの比較を少し考えてみたい。明治キリスト教世界での影響力が知られるアメリカ系プロテスタント各派には、日本の知識層をターゲットにしうる「英語」あるいは「教育」という武器があった。熱烈な福音主義のもとで来日した宣教師は、彼らのもつ英語力あるいは学識をもとめて集まる日本人を通して教勢拡大を図り、それが文明開化期のプロテスタント布教の一つの姿であった。来日宣教師の使命は、「異郷」の人々を啓蒙的なキリスト教で救い出すことだった。しかし、本書で描かれる北東北の東方正教受容には、それとは違う世界が広がっている。

来日宣教師ではなく日本人の伝教者たちが、「信仰」というよりむしろ「教え」に近い形で、地域の間関係の中で広めて行ったハリストス正教会の活動は、日本におけるキリスト教受容の姿をあらためて考える契機となるのではと思われる。丹念に、資料を読み込むことから描きだされた北東北の近代。実に魅力的な本書をぜひ手に取っていただきたい。（A5判、二八七頁、二〇一四年九月十七日発行、清文堂出版株式会社、七八〇〇円＋税）

（きたはら・かなこ 青森中央学院大学教授）